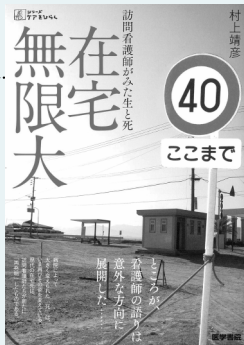


《シリーズケアをひらく》
在宅無限大
 訪問看護師がみた生と死

村上靖彦＝著
 本体2000円＋税
 医学書院 ☎03-3817-5600



自分の実践の意味を 実感しきれないでいるあなたに

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 高齢者在宅長期ケア看護学分野教授 山本則子

看護師になった理由は、人によってさまざまだろう。けれど、自分のケアを喜んでくれる人の笑顔を見たり、どうにも

ならない障害や病に苦しむ人の前に愕然とたずんだり、無力感に苛まれて仕事を辞めたく

なったりしたときなどに、看護師として人をケアすることの意

味や価値について、深く感じ入ったり、考えてみたりしたことが、誰しも一度はあるのではないだろうか。

『在宅無限大』は、そうした看護師が人を

ケアすることの意味について、時にぼんやり感じるだけであることを言葉にしてくれる。

看護という不思議な仕事

看護は不思議な仕事で、説明が極めて難しい。自分で働いてみないことには、やっていることを理解するのは無理とすら感じる。

看護学の教科書では、複数の患者さんに適用可能な、具体的な看護実践行為によって看

護を語る。「保清」「食事の介助」「排せつのケア」「褥瘡処置」などのような区分である。それは確かに看護師が実践していることで、これらのことが実践できずには、看護師としての機能できない。

けれど、これらがどのような意図で、どのような文脈において、どのようなタッチで実践されるのかという患者・看護師の個別の文脈を抜きにして、これらの技術だけを提供しても看護にはならないのである。

また、看護学の教科書に出てくる言葉の中には、「自己実現」「生活（生命）の質」などといった抽象度の高い文言も並ぶ。そして確かに、看護はこれらをめざして実践を展開するのだけれども、どうやったらこれらが実現できるのかまでは詳述されていない。「保清」と

「自己実現」の間を結ぶルートについては、ブラックボックスのままになっているように感じる。

行為している看護師自らの世界から 看護を語る

『在宅無限大』では、個別の訪問看護利用者の文脈の詳細と、その文脈に応じた看護師のケアリングの思いや願いに乗せて、「保清」「食事介助」「排せつのケア」「褥瘡処置」等の看護実践がどのように展開されたのか、そこに生じた実践行為の意味に関する丁寧な解説を含めて紹介される。そうすることによって、ある患者と出会い、その困りごとに触発され、患者の「自己実現」や「生命の質」を願った看護師が、どのように自分のもてる「保清」などの技を使い、その実現に至っているのか（あるいはそうしようとする心）もときどきどうしようもなく、途方に暮れるのか）が生き生きと描かれる。このような看護実践は、個別事例にとことん踏み込んで、行為している看護師自らの世界から説明しなければ、他者に理解できる形にはならないのだから。

現象学の研究者が、人の病や苦しみに関心を持ち、さらにそこからの回復や、回復を可能にした他者の関わり、あるいは関わりから生まれる両者にとっての救いのようなものの発生に目を向けたときに、このような本になるのではないか。

『在宅無限大』を読むことは、自分の実践の意味を実感しきれないでいる多くの看護師にとって、カタルシスになるだろう。看護師にとっての本書の魅力は、そのあたりにもあるのではないかと感じる。